

# 「分析ってなんだろう」から「分析をやってよかった」まで



小 谷 明

筆者が大学の分析ラボに入った昭和 50 年は HPLC がようやく普及しだし、ppm 分析がもてはやされた時代であった。筆者もこれらに憧れて分析の門をくぐったのだが、HPLC カラムがなかなか言うことを聞いてくれなかったことを覚えている。学生さんたちにやるだけやったら最後は神頼みと言っているのはこの時の経験が大きい。修士には C13-NMR をテーマに悪戦苦闘したが、自分なりに一つの見解を作れたのは以後の研究に大いに役立った。現場をよく知ることがまず肝要なことを学んだ。博士には金属錯体の非共有結合のテーマをいただいて分析の分野の広さに驚きながら、非共有結合の検出に明け暮れた。その後、分析研の助手になって「分析ってなんだろう」と考えるようになった。薬学部教育上では初めの実習は分析実習であり、長くない実習では項目を選択せざるを得ない点やラボ研究との相当な隔たりも悩みの種であった。現在でも、現実に使われることの少ないビュレットを使った実技の取得にはどのくらい意義があるのだろうかと思悩む。しかし、予め見当をつけること、肝心なところでの丁寧な操作等々、他に代わるものがないのが現状で、教育用と割り切ったほうがすっきりする。同じ教育用なら、ゼロ点を戻す電子天秤はけしからぬ（実技のプレ試験でもゼロ点が戻ったどうかのチェックはない）、上皿天秤、可能なら吊り天秤棒を実習に持ち込んだほうがよいのではないかなど、表面的でない実体験的な分析化学を教える難しさを感じることも多くなった。まさに分析は工夫のしどころ満載である。しかし、今の学生さんは早く楽に実験ができる点には敏感であるが、可能な限り正確にという分析コンセプトへのレスポンスは悪い。この分析コンセプトは科学研究の第一歩ともいえるべきもので重要である。さて、新人類を相手にどうしたら分析化学の面白さ、憧れを知ってもらうことができるだろうか。日々悪戦苦闘であるが、これが結構面白いことに最近気がついた。初等教育を預かっているので学生さんが受けた教育の変化を最初に受け止めるためかと思われるが、彼らも年々変化しており、それに合わせるとなると工夫が一杯必要である。「分析をやってよかった」である。本来は、学生さんに分析の面白さを伝えてこそ、「よかった」であり、この点ではまだまだ未熟、辿り来て未だ山麓であり、同じような思いをされている分析化学会の方も多いのではないだろうか。若い人達にどうやって分析の面白さ、憧れ、心を伝えるかは、これからの分析化学会の重要な役割ではないかと思っている。同じ悩みは大学だけではなく、企業もお持ちではないでしょうか。常に人口増で切磋琢磨せざるを得なかった世代と人口減少の世代、古くは PC が当たり前の世代とそうでない世代とも言われましたが、では捉える感覚が違って当たり前です。皆さんのお知恵を集める場所として分析化学会が今後ますます発展・活躍することを期待しております。

〔Akira ODANI, 金沢大学医薬保健研究域薬学系, 日本分析化学会中部支部長〕